


 TOPICS
3

トピックス…③

平成24年度

酪農教育ファーム・スキルアップ研修会の概要

平成24年度の酪農教育ファーム・スキルアップ研修会は、「コミュニケーション」、「手作りバターの味を極める」、「酪農体験の導入の作り方」をテーマに、福岡（9月）、大阪（10月）、東京（11月）、仙台（11月）、札幌（12月）の5会場で開催され、合計で97名のファシリテーターが参加した。

研修会では、「コミュニケーション」、「手作りバターの味を極める」、「酪農体験の導入の作り方」の3テーマにそって、藤本勇二氏（武庫川女子大学）が「子どもたちの心に落ちる酪農家の話」、品川明氏（学習院女子大学）が「4つの心で食を意識する」、松木正氏（マザーアースエデュケーション）が「今を生きる、子どもたちの現状と育ち」について講演した。

子どもたちの心に落ちる酪農家の話

子どもたちの心に落ちるとは、「腑に落ちる」、「納得できる」ということである。そのためには、じっくりとものと考えて、自分で決めていくための時間が必要である。牧場での体験では、必ずしも量として十分な時間を確保できないという現実があるものの、質的に充実した時間を確保できる可能性がある。

子どもたちにとって充実した時間は、いのちの現場に触れ、ままならないことに上手につき合う方法を酪農家の姿から学ぶ体験から得られる。例えば、酪農家が乳牛という大型動物を巧みに操り、慣れた手つきで搾乳をする姿を目の当たりにしたとき、子どもたちは驚きとともに、ままならないこととの付き合い方を学びます。子どもたちは、乳牛とふれあいながら、実はその先にいる酪農家の姿を見ている。

そのような関係性が形成された酪農家から、気持ちに寄り添い共感する言葉で語りかけられたとき、子どもたちには酪農家の熱意や思いがしっかりと伝わる。こうして、酪農家が語る話は子どもたちの心に落ち、牧場での体験が充実した時間となる。

4つの心で食を意識する

平成17年度に食育基本法が制定されて以来、教育現場でも家庭でも、食の知識や情報を得る機会が増えてきた。しかし、次代を担う子どもたちに食教育を通じて継承してほしいことは、食に関する知識や情報だけではなく、食そのものを意識することである。それを実践、浸透させるためには、「ありがたい」、「いただきます」、「ごちそうさま」、「もったいない」の4つの心が重要な要因となり、それら4つの心に共通している「食はいのちであり、つながりであり、恵みである」

という概念を理解することが必要である。

この4つの心の意味をひも解くと、食教育の本質的な目標が見えてくる。つまり、食べ物が本来もつ隠れた価値に気づき、食卓にのぼるまでのプロセスを知り、食べ物の味わいを五感で感じることである。そのためには、牧場など食の生産現場での体験が必要である。

例えば、牧場で生産の流れを確認しながら、バターやアイスクリームなどの手作り体験をすることには大きな意味がある。乳牛がどのようにしてミルクを出し、酪農家がどのような思いで乳牛を育てているのか、ミルクは実は誰のものなのか等を理解した上でバターを作ると、いつもとはバターの見方が変わる。この見方の変化が、食教育において極めて重要な「バターは大事な食べ物」という観念を育てていく。

今を生きる、子どもたちの現状と育ち

牧場体験する子どもたちの姿を見る基準は、積極性と消極性に加え、主体性と客体性がある。積極性と消極性は、「すること」あるいは「できること」に対する評価であり、主体性と客体性は、自分がどうあるかという「あり方」の問題である。

今の子どもたちを見ていると、たとえ積極的な態度をとっていても客体性の強さを感じる事が多くある。例えば、与えられた課題は効率的、効果的にやり遂げていくが、自分の考えや意見を求められると戸惑ってしまう。何が「できる」、「できない」で自分の存在を評価し、他人が自分をどのように見ているかが気になる。

しかし、経済が低迷し、今までのやり方が通用しなくなった現代、主体性は時代が求めている大きな力である。間違っても、失敗しても、自分の感じたことや考えをきちんと言える人材を社会は求めている。酪農教育ファーム活動はいのちに触れる実体験が伴い、それにより感情が揺れ動くシーンがたくさんある。そのとき酪農家が、「何を感じた」、「どう思った」と子どもたちの気持ちに寄り添い、言葉をかけることで、自分の感情と向き合うチャンスが与えられる。このような体験を重ねることで、子どもたちの主体性は育まれていく。